



2015年12/2016年1月号
 新版 第77号
 編集
 駿台甲府高等学校
 駿台甲府中学校
 駿台甲府小学校

五十年後の世界は？

指導監 石川 博

新年を迎えることに、五十年前、百年前、二百年前・・・のことを調べる習慣がしばらく続いている。

一九六六年は丙午ひのえうまの年、普通科の筒井副校長を始め、高校三期生の多くがこの年に生まれている。ピートルズが来日し、高倉健が「唐獅子牡丹」を歌い、巨人軍の堀内恒夫が新人開幕13連勝を記録した。中国では文化大革命が始まり、アメリカはベトナム戦争で苦戦していた。東京には国立劇場が開場し、甲府では山梨文化会館が建てられた。テレビ番組では「笑点」が始まり、NHKの大河ドラマは菊之助(現菊五郎)主演の「源義経」だった。

そして山梨は台風26号に襲われ、足和田村などで多数の犠牲者を出した。私は小学校三年生、多くの情報をテレビから得ていた。

百年前は大正五年で、第一次世界大戦の最中。アインシュタインが一般相対性理論を発表し、ソシユールの「一般言語学講義」が出版される。日本では漱石が逝去した。

百年前と五十年前の間に、太平洋戦争

争があり、大きな断絶がある。例えば百年前にはまだラジオ放送もない。それが、五十年前はテレビがほぼ全世界に普及していた。何より憲法が一新され、国の枠組みが転換し、教育制度も大きく変わった。

一九一六年からの五十年間に比べ、一九六六年と今日の間には大きな断絶はないように思われる。コンピュータ関連の発展があり、情報の得方は変貌しつつあるが、国の枠組みや教育制度に本質的な変化はなかった。

さて、人類の知の枠組みという面では、百年前のアインシュタインやソシユールの理論が現在に至るまで通用している。彼らは、それ以前のパラダイムを転換させたが、物理学も言語学もその後、大きなパラダイムシフトは起きていないだろう。

現代文の教科書に載る「言語」に係する評論文は、多くがソシユールの理論を敷衍したものである。そのポイントは二つで、一つは、言語に先立って認識があるのではなく、言語にともなうて認識が生まれるということ。つまり、「花」という言葉があるから、様々な種類の色とりどりのモノを「花」と認識できるのであって、先に認識があるのではない。

もう一つは、音韻においても、概念

においても、差異だけが意味を持ち、その言語独特の区切り方を行っているという主張だ。たとえば、「イヌ」という言葉の概念は、「イヌ」以外のすべての概念(ネコ、太陽、工場、川、地球...)との差異で存在している。そして、その切り分け方は、普遍的ではない。ここから翻訳という作業の危うさが説明できる。

ソシユールを基盤にして、構造主義やサルトルの実存主義哲学が生まれたと言っても過言ではない。ソシユールは言語の分析にとどまらず、現代思想を考える上で欠かせない人物であり、その名著が百年前に出版されたのだ。

アインシュタインに関しては、専門外であり受け売りになってしまいが、現代の物理学への影響は言語学におけるソシユールと同等のものがある。

言語論はここしばらく、センター試験の現代文に出題されていないが、大学入試でよく扱われるテーマの一つだ。そして構造主義をはじめとする、現代思想に基づくものの見方、近代の限界論は、センター試験に頻出する。二〇一〇年には、岩井克人の「ポスト産業資本主義」をテーマにした評論、十一年の鷲田清一の高齢者の文化論、十二年の環境と個体の論、といずれもが近代への懐疑をベースにしている。十三年は、小林秀雄の「鏢」を題材にした得意の歴史を相対化する論、そして十四年は、江戸時代の漢学を扱ったものと、この二年間はやや毛色が異なるが、センターの追試ではそれ以前と同様、ヴァーチャルリアリティや宇宙論

など、現代的な問題を出题している。なお、十五年の本試験はインターネットのリテラシーに関するものであった。こうしてみると、保護者の方々が受験なさった頃の、共通一次試験や初期のセンター試験とは様変わりしていることがお分かりかと思う。

ちなみに小説も、現代ものが出たり、百年近く前の作品だったり、実に様々だ。中には十五年追試のように、大庭みな子の、七十歳の女性を主人公にした恋愛小説もある。

大学入試改革への対応は、マークシートをやめるかどうか、だけを予想してもあまり意味がない。当然ながら大学は現代にそくした学生を求めており、高校教育もそれを意識する。国語の教科書には現代的な題材の作品も並ぶ。

高校一年生は、村上春樹が翻訳した、ベトナム戦争に関するアメリカの小説を学んだ。高校二年生は、三学期、まさに言語論を扱う。そうした題材を学ぶ中から、「近代後」の世界を築くような考えが育っていくのだろうし、我々もそれを期待して授業を行っているのである。

五十年後の世界、それは想像を絶するのではないか。この五十年に比べて次の五十年は大きく変貌する可能性が高い。世界全体に閉塞感が高まってくれば、新たな政治システムが求められる。二百年以上続いた「近代」の終焉を迎えそうなのである。その時、価値観や、善悪の判断基準や、正しさの定義も大きく変わる。それは、多くの若者にとってチャンスなのである。

高校研修旅行

グローバル推進室 室長 河崎 哲郎

2016年の始まりとともに、生徒へGEC(Global Education Committee)のリーフレットを配布しました。グローバル教育推進室が発足して10か月、マレーシアの学校との姉妹校締結、高校生のためのホームステイプログラム、小中高各校への「English Center」の開設等、様々なことを手掛けて参りましたが、その事業のうちの一つがこのリーフレットの発行でした。そこにも記してあります通り、駿台甲府のグローバル教育の目的は、「生徒達が世界に目を向け、世界をより良い場所にするために様々な国の人たちや異なる文化的背景を持つ人々と協働することを奨励して行くこと」です。是非ご理解を頂きたく、よろしくお願ひ致します。

② 台湾コース

近隣諸国との関係をテーマとしたコースです。世界中どの国においても近隣諸国との関係はとても重要かつセンシティブな問題です。日本における近隣諸国といえは韓国、中国、台湾等が考えられますが、政治による関係の安定度など様々な面を考慮して台湾コースでスタートすることにしました。高校時代に近隣諸国との関係強化の方策を考へることはとても大切なものと考えています。台湾では現地の高校も訪問して交流することを予定しています。

③ 近隣英語圏コース

英語に的を絞ったコースです。前述しましたように、グローバル社会のベースとなるものに英語でのコミュニケーション力があります。このコースでは、一部観光を含めるものの、基本は英会話訓練というものです。現地の語学学校と提携し、英会話訓練をする予定です。「習うより慣れる。」とはよく言われることですが、英語に慣れ親しみを感じることはこれからの日本の社会で大切なことだと考えております。

④ 国内コース

現在、沖縄を想定しております。

さて、現在取り組んでいることの一つに高校の研修旅行の見直しがあります。駿台甲府学園全体の方向性に則り、国内コースを一つにしぼり、これまでの海外コースを3コースに増やすことと致しました。といつても、ただ海外へ行き見聞を広めるということにとどまるのではなく、それぞれのコースにテーマを設定し、それに沿って各生徒が自らの目標設定を行い、探求実践するということを主たる目的としています。ここでは、国内コースを除いた海外の3コースの紹介をいたします。

異文化共生社会をテーマとしたコースです。ご存じの通り、日本は今あらゆる分野でグローバル化に対応すべく

第31回美術デザイン科展

美術デザイン科 担当 四條 朋恵

昨年の12月23日から1月3日に第31回美術デザイン科展を開催しました。一年間、生徒たちが課題で制作した作品や時間をかけて制作した公募作品、また美デ科展のためだけに制作したコンクール作品などを展示しました。今年度は授業作品の他に、工夫を凝らした作品や立体作品などおよそ800点の作品を展示することができました。



年末年始のお忙しい中、PTA役員を中心に保護者の方々に搬入搬出にご協力いただきまして、誠にありがとうございました。幾つかの新聞に展覧会の案内が掲載されたほか、YBSラジオの生中継や甲府CATVで街かどピックスの取材もしていただきました。(1月11日から17日放送)その放送を聞かれた方や多くの保護者や卒業生にご来場いただき、大盛況で終えることができました。

今回の来場者数は受付のカウンターで891人、投票者数は752人で四千八十票となりました。来場者からは「力作ぞろい作品からエネルギーをもらいました」、「教育現場から芸術に費やす時間が少なくなる中、このような取り組みを行っていることに敬意を表します。」と言った多くの感想をいただきました。

会場で行いましたコンクールにつきましては各学年から上位4名を大賞者と準大賞者として表彰します。1年生は鹿野稜介と清水優衣、2年生は齊藤かのん、3年生は田中萌が大賞となりました。詳しくはホームページに掲載いたしますのでご覧下さい。表彰は予餞会の時に行い、PTAから賞品も贈呈されます。

現在、美術デザイン科展で展示した作品をまとめた美デ科創作集の制作も行っております。発行は卒業式になりますのでお待ちください。

毎年行っている美術デザイン科展を無事終えることができたのも、日頃から学校の教育活動にご協力を頂いている保護者の皆様や多くの方々の支えがあつてのことです。今後も美術デザイン科職員一同、生徒がより充実した高校生活を送れるよう、生徒とともに努力していきたいと思っておりますので、変わらぬご支援の方よろしくお願ひいたします。



3年大賞 田中萌 「田中萌」 S.10×16. 油彩

砂金掘りからのディベート

中学校 3学年主任 鹿山さおり

七夕の昼過ぎ、高校の原先生から新田先生あてに、1本のメールが舞い込みました。「砂金掘り大会出場メンバー表を、至急提出されたい」。ここ5年間、参加から遠ざかっていた大会ではありましたが、久しぶりに中高合同チームで参加することが決まったのです。ひよんなことから、中学生の引率をすることに、事前練習会から本大会を通じて、原先生から呪文のごとく、事あるごとにディベートについての蘊蓄を聞かされました。気が付けば、あれよあれよという間に、中3のCSの授業、コミュニケーションの一環としてディベートを実施する運びとなりました。原先生の話術にかかったふりをして、保坂副校長と2人で、「これで、ディベート部におんぶに抱っこできますね。」と、ほくそ笑みしました。

10月に入ると、高校生によるディベートの実演と入門講座が行われました。居眠りをしている生徒こそ見当たりませんが、みなキツネにまつまられたような顔をしていたので、「これはマズイ：…」と早くも後悔の念が頭をもたげました。

第2回目からは、立論作成にとりかかりました。「救急車を有料化すべきである」という身近な論題から、『少年犯罪（20歳未満）における実名報道をすべきである』という社会派のものまで、各クラス2つずつ、8つのテーマにわかれて準備を進めました。高校生も塩部校舎から自転車で駆け付けて

くれて、後輩たちの指導にあたってくれました。新聞記事などから情報を集める生徒たちの表情は真剣そのものでした。「もつともつと準備したい。」そんな声も聞こえてきました。

3回の準備をかさねて、各クラスごと4チームにわかれてのディベート大会を迎えました。本大会さながらに、高校生がジャッジ席に座り、大会をサポートしてくれました。従来の試合に加えて『相互討論』を盛り込み、チーム全員が意見を述べるという形を取り入れました。われ先にと手が挙がり、白熱した討論が繰り広げられました。

どのクラスからも活気ある意見が交わされ、普段の授業とは一味も二味も違った雰囲気となっていました。

「またやってみよう！」という声に応える形で、1月に学年チャンピオンを決定する大会を実施することになりました。論題は『日本は、選択的夫婦別姓を法的制度として認めるべきである。是非か非か』です。

暑い夏、湯之奥金山に砂金を掘りに行ったつもりが、金よりもっと価値あるものを掘り当てられた気がします。

原先生の呪文にかかったのは、私だけではないです。



駿小音楽集会

小学校 音楽集会 担当 山下 潤

二期期の締めくくりの時期となる12月18日に小学校で音楽集会を開催しました。この音楽集会は、日頃の音楽の授業の中で取り組んできた成果を全校児童の前で発表する場であり、また、幼少連携の一環として新生保育園の園児に来校していただいています。東京ディズニーランドでの演奏を許可される実力で、小学生も迫力ある演奏に聴き入っていました。さらに駿小合唱部と吹奏楽部の発表もありました。

小学生の音楽集会の特徴は何と言っても、一生懸命さです。特に低学年の合唱や合奏では、喉がつぶれてしまうのではないかとというくらい大きな声で歌ったり、合奏もリズムをとりながら自分の役割を果たそうと一生懸命頑張る様子が見られます。これが高学年になると少し変わり、合唱も二部構成になり、曲調に合わせて音に強弱をつけたり、扱う楽器が増えたり、合唱曲だけでなくゴスペルやポップスなども取り入れたりしてきます。曲名を見ていただければわかると思いますが、今年も特に多岐に渡る内容で、見て、聴いて楽しめる内容でした。

さらに、どの学年も工夫を凝らし、学年の特徴をいかした



発表に仕上げました。服装や小道具を用意したり動きや踊りをつけたり、拍手を求めたり、曲そのものをアレンジするなど様々でした。さらにはソロパートがあり、全校児童の前で一人て歌う学年もありました。

中には教員も一緒に歌ったり、仮装して踊ったり、演奏するなど一体感のある音楽集会でした。来年はぜひ保護者の方も参加できる形で開催したいものだと感じました。



■音楽集会 全曲名

- ・ 新生保育園「ミッキーマウスマーチ」
- ・ 「ハイホー」「エレクトロリカルパレードのテーマ」「美女と野獣」
- ・ 「シング、シング、シング」
- ・ 1年生「子犬のマーチ」「にじ」
- ・ 2年生「クリスマスメドレー」
- ・ 「ともだちになるために」
- ・ 3年生「木星」
- ・ 「とどけよう このゆめを」
- ・ 4年生「ありがとう」
- ・ 「民衆の歌がきこえるか」
- ・ 5年生「威風堂々 第1番」
- ・ 「Hail Holy Queen」「Oh Happy Day」
- ・ 6年生「炎と森のカーニバル」
- ・ 「ふるさと」
- ・ 合唱部「るりいろの地球」
- ・ 吹奏楽「アメリカ」「銀河鉄道」

「石橋湛山平和賞」最優秀賞受賞

高校 地歴公民科担当 原 正人

穂山あかりさん(1年B組)は山梨平和ミュージアム―石橋湛山記念館―主催の第四回「石橋湛山平和賞」中高生の部で最優秀賞(応募252点)を獲得、昨年末に受賞式に出席しました。

式では、作家の井出孫六選考委員長はじめ選考委員の諸先生方から「書き出しから惹きつける卓越した文章力」「過去の戦争の教訓から現代の平和の問題を深く掘り下げの思考力」の両面が高く評価されたと講評頂きました。

受賞者を代表しての記念スピーチで穂山さんは、中2の時に平和ミュージアムを訪ね石橋湛山の人物と思想にふれたこと、修学旅行で広島を訪れて原爆について学んだことが、平和について深く考えるきっかけになったと語りました。また、戦争体験者である祖母から戦時中の話を聞いて育ったことが、今の日本のあり方を考える上で大きな拠り所になっているとも。

穂山さんは、スピーチの最後を次のような言葉で締めくくりました。

「自分の願いや希望は、自分が努力すれば叶えられるという平和な時代を幸せに思い、この平和が続くよう、私たち若い世代が努力していかなくてはなりません。ばと思つていきます」



英語暗唱大会 優勝!

高校 ESS担当 堀江 健太郎



山梨県英語弁論暗唱大会暗唱の部において優勝を果たした1年H組中国有貴さんの感想をご紹介します。

「スピーチが始まる前、私は緊張していました。何度も先生の方を見てしまい、そのたびに先生は“深呼吸と笑顔”と言ってくれました。今までの練習で何度も表情を豊かにするように練習しました。それを水の泡にしないようにしようと思いました。私の名前が呼ばれたとき、私は深呼吸をし、笑顔で壇上に上がりました。すると、気持ちすごく楽になったのを感じました。自分の今まで練習したのを見てほしい、聞いてほしいと思います。一番のものを発表できたと思います。

この賞は私ひとりです。自分だけではありません。今まで放課後にずっと見てください、表現の仕方を一から指導してくださった堀江先生。ネイティブの目線から言いまわしを教えてください。サ先生。また、放課後にスピーチを聞いていただきアドバイスをくださった先生方。多くの人に支えられ、私は自信をもってスピーチをすることができました。本当に感謝の気持ちでいっぱい입니다。これからも努力していきます。と思っています」

全国選抜初出場 当確!

高校 テニス部担当 中村 幸央

秋の新人戦を優勝した男子テニス部は、12月24日〜26日に千葉県の白子町で行われた関東選抜大会に昨年に続き今年も出場しました。この大会は、関東の8都県の代表校16校のみで争われる熾烈なトーナメントです。敗退後も順位戦がひたすら続き、1位から16位まで完全に序列がつけられるというものです。その理由が3月に行われる全国選抜大会に出場する高校選抜を兼ねているからで、例年関東ではこの大会の10〜11位くらいまでしかその資格を得られません。

- 対戦結果
- 日大三高(東京) 1勝4敗 負け
- 足利工附(栃木) 3勝2敗 勝ち
- 共愛学園(群馬) 3勝2敗 勝ち
- 法政二高(神奈川) 1勝4敗 負け
- 文星芸附(栃木) 3勝2敗 勝ち

総合順位9位

参加選手
依田隼斗 清水琢朗 吾妻駿人 津金友人 前田理玖 渡辺将貴 嶋崎律己 加々美勇規 染野優作
数字的な記録を書くところのようにあつけないものですが、この数字の裏に部員たちのギリギリの奮闘があったこと、誰かが負けても誰かが勝つてそれを補い(毎試合勝者が違う!)、自分の試合でなくてもベンチに入つて声を掛け続けたことが本校初の全国選抜出場を勝ち取ったのだと思います。

金賞ダブル受賞!!

中学校 吹奏楽部顧問 内山 晶夫

今年度は、本校の吹奏楽部にとって、念願の夏・冬金賞ダブル受賞と、創部以来初の快挙達成の年となりました。夏は30名の最大編成で臨んだ、第55回山梨県吹奏楽コンクール中学校Bの部で2年連続金賞を受賞しました。当日、全体で昨年と同じ4位という好成績での金賞受賞でした。

冬は、少人数編成(3〜8名)によるコンテスト、第39回山梨県アンサンブルコンテスト中学校部門で金賞を受賞しました。アンサンブルとしては本校初の受賞。1年生1名、2年生7名の最大編成8名(木管打楽器八重奏)で臨みましたが、「すばらしい見事な演奏」という審査員の高い評価をいただくことができました。同時にあと1点で金賞を逃した昨年の雪辱も果たすことができました。

この快挙達成は、部員たちの強い思いと毎年の積み重ねの結果であること強く感じさせられます。部のモットーである『奏和(そうわ)』||『皆の力を合せて、和を奏でる』の精神のもと、連日のハードな練習によく耐え、栄光を手にした彼らを称えるとともに、ここまで部員たちを献身的に導いて下さった外部指導者の天野先生に心より感謝したいと思ひます。

